

『文学談叢』(初集)について

——一葉関係文献補遺——

山根賢吉

日本詩人クラブ編の『文学談叢』(初集)は、五百部限定版のせい、あまり見かけない本である。『日本近代文学大事典』(第四巻 事項)の「日本詩人クラブ」の項には、『文学談叢』とミスプリントされる始末で、陸上のものが水中に没したかの感がある。

本書は、昭和三十三年一〇月、吾妻書房から発行されたB6版四百頁近いもので、その「あとがき」に、
本書は日本詩人クラブが創立以来欠かさず催してきた月次例会に於ける、各専門家の講演の、草稿、筆録、「詩界」編集者の手に成る趣旨要約を主として、之に会員の寄稿若干を加へて一冊としたものである。」

(中略)

本書に収めた講演の草稿、筆録は、さきに一度「詩界」に掲載して会員諸君の閲覧に供したのであるが、今これを繙読に便利な諸冊にまとめて再刊し、会員及び一般読者、研究家の参考に資することにしたのである。とあつて、発行の経緯が記されている。

本書は、「日本篇」「外国篇」にわかれ、「日本篇」には、山宮 允の「湯浅半月について」以下三十三編が、「外国篇」には、千葉 勉の「シェイクスピア研究について」以下二十二編が収められている。執筆者は、山宮 允のように、両篇にわたって計四編を収めている者、正富汪洋、木村 毅のように、各一編を収めている者のほかは、一人一編で、計五〇人に達する。本稿でとりあげるのは、「日本篇」の中の

上田敏と樋口一葉

吹田願助

である。

吹田は、先ず題名について、

私としては柳村と一葉の比較をしようといふのではなく、人間的關係を話すつもりでもない。といつて両者は無關係ではなく、短期間ではあつたが交際があつた。そんなわけを二人を中心に思ひ出話をする次第である。

と、ことわた上、

柳村、上田敏は私の従兄に当るが、私より十歳ぐらい先輩であり、先生でもあつた。大学で教へを受けたこともあり、またいろ／＼世話にもなつた人である。

それで敏の系図を話してみると、敏の父綱二（けいじ）は乙骨彦四郎といふ幕末の儒者・漢詩人（号は耐軒）の二男であつた。彦四郎は若いとき甲州乙骨村から江戸へ出て幕府に仕へ、昌平校に勤めた。

と述べた後、

敏の父綱二は乙骨家から上田家へ養子に行つた人、敏の母は孝子、その父は友吉で時勢に先んじた考へを持つた人物らしく、新潟の開港に尽力し、ロシア公使になれとすゝめられたが断つたほどで、維新前に渡歐したこともある人

だつた。

と、母方の系譜に移り、「上田家からは歐米に行つた人も可なり出てゐる」こと、また上田家や敏の思い出などを語り、雑誌「芸苑」に及んでいる。

一葉については、先ず

一葉に就いては私の個人的な思ひ出を話したい。私は子供の時、一葉が中島歌塾にゐて「文学界」に「闇櫻」を載せた頃、乙骨のまき子さん（私の従妹）といふ才媛が中島塾へ通つてゐたが、その頃私の家へ来て、私の母に「樋口のお夏ッつあんも近頃は、仲仲偉くなつたもんですよ」と云つたことを小学生だつた私は妙に覚えてゐる。私が開成中学の二年へ入学したころ、クラスの文学好きの生徒はもう紅葉、露伴、一葉などを読んでゐた。

（中略）

私は分らずなりに一葉の虜になつた。紅葉や露伴とは違ふ処があると思つて、すっかり好きになつてしまつた。敏は「一葉は背水の陣を布いてゐる」と云つてゐるが、面白い言葉だ。彼女の對世間の態度にも、作品に對する立場にも、何か切実なものがあると思つた。「わかれみち」などの作品は今日でも感心する。

とある。『『文学界』に『闇桜』を載せた』とあるのは記憶違いで、『『文学界』に『雪の日』か、『武蔵野』に『闇桜』か(後掲「実践文学」では後者に訂正されている。)、いずれにしても、明治二五、六年頃のことになる。「私が開成中学の二年へ入学したころ」とは、明治三〇年頃になるから、ちょうど、『一葉全集』や『校訂一葉全集』が刊行された頃に当る。

上田敏の「一葉は背水の陣を布いてゐる」は、「一葉女史追懐談——天才肌の人——」(『国民新聞』明治41年11月23日)の中の故人は今日の時勢とは違った社会の中に生れてあれ位の考を持つてゐた。又背水の陣とでもいふやうな生活を送つてゐたのは殊に女性として勇ましい事で、この気性がやがて其作物にも現はれて居る。

とあるのに拠っていることは言うまでもない。

「別れ道」を高く評価する点は敏に一致する。すなわち敏は「一葉女史」(『中央公論』明治40年6月)で、

「一葉女史の作物中で、傑作と推すべきは如何あつても『別れ道』だ、短いものだが詞も想も良い。」

と述べ、「一葉女史追懐談」(前掲)で、

故人の作中大作ともいふべきは『たけくらべ』で、短くはあるが秀逸といふべきは『別れ道』である。故人の性格は

『別れ道』の主人公に現はれてゐる。

と指摘している。続いて吹田は、

私が中学時代の明治二十九年に一葉は死んだ。私は高校から大学へはいったころ、伝通院前に文房具の礫泉堂といふのがあつたが、それは一葉の妹の邦子が、やつてゐた。それは西洋人のやうな大柄で目も大きく鼻も高く、近所ではラシャメンとさへ云はれてゐたさうである。しかし目の涼しさは一葉に及ばないと思はれた。私はその店の前を通るたびに鉛筆やインキなど買った。その頃もやはり一葉にひきつけられてゐたので、僕はあなたの姉さんを崇拜してゐる者ですよとか、なんとかその邦子さんにいつてみたかつた。クラス会での酒の勢ひか何かで、さう云つたことがあつたかも知れない。その後、店の前を通ると、邦子さんが目礼してくれたやうな氣もする

と語っている。明治の、若き一葉ファンの面目躍如たるものがある。「目の涼しさは一葉に及ばないと思はれた。」は、後の「実践文学」では「(しかし写真で想像するだけなんだが、目もとの切れ目や涼しさでは、一葉の方がずっとまさつていたのでなかるうか。)」とある。そればかりではない、さらに、

森田草平の処へはよく行つたが、草平は大学を出る時分、

本郷区丸山福山町の一葉の住んでゐた家を借りてゐたこと
があり——「にこりえ」を書いた家——、その家を三四
度訪れたこともある。草平は、もう若い頃から小説の方は
相当経験もあつたので、私の小説などもよく批評してくれ
た。その頃、「芸苑」の私の短編「お菊」を草平が「こり
や正に一葉張りだね」と云つてほめてくれたので私はバカ
に嬉しかつた事をいまだにおぼえてゐる。その小説は明治
三十九年ごろ書かれたもので、荒筋をいへば、定価四十銭
の古本を十銭にまけてくれないうか、ある少年が神楽坂通
りに露店を出してゐる古本屋へ二三度通つてくる。そこで
そこのお菊といふ小娘がまけておあげなさいと父親にいひ
たくてならないのだが、どうしてもそれが云へなかつたこ
とを書いたもの。

「お菊」は未見だが、右の文章によれば、一葉が「闇桜」以来
描きつづけた、心には思えども口には出せぬ女性像を描いたと言
えようか。「——にこりえ」を書いた家——は十分な説明には
ならず、「たけくらべ」も「わかれ道」も、およそ一葉の名作
と言えるものは丸山福山町の家で書かれたわけで、「——にこり
え」に書かれた家の隣——とでもした方がよかつたであらうか。
ともあれ、「上田敏と樋口一葉」は、明治三〇年代の学生の

一葉への傾倒を物語るよき資料であり、後年ヘッベルをはじめ、
ヘルダーリン・ゲーテを論究された吹田順助氏の若き日の側面
を示していよう。同氏はこの後間もなく、「実践文学」の創刊
号に「一葉の思い出」という題で、より詳細に記しておられる
が、その前の形を示すものとして、『文学談叢』所取のものを
とりあげてみた。「実践文学」の創刊号の刊行は、昭和三二年
七月で、『文学談叢』より三か月ほど早い。吹田氏が日本詩
人クラブで話されたのは、同年四月のことで、「一葉の思い出」
の冒頭でも、そのことを記しておられる。

「上田敏と樋口一葉」及び「一葉の思い出」を読んで思いつ
いたことは、兩人とも甲州人の血が流れているということ、
初対面の明治二八年五月七日、一葉は「水の上につ記」の中で、
上田君、名は敏 帝国大学文科生にして帝国文学の編輯人
なるよし 温厚にして沈着なる人からよき人也 はやう中
嶋のもとにて姉弟子成し乙骨まき子ぬしがいとこと聞くに
初見とも覚えずいとしまれぬ
と記しているが、その背後に同じ甲州人としての親しみを考え
るのは深読みであらうか。

なお、『文学談叢』は統刊されたのかどうか、今のところ手
がかりがない。